

昭和
三十四年七月二十三日
第三種郵便物認可
（毎月一回、十五日発行）

（通第一一九号）

慈光

第十一卷 第二號

目

真の信仰・仮の信仰……………近角常観……………(1)

聖徳太子の御忌に……………花田正夫……………(8)

善知識を訪ねて……………福島政雄……………(12)

次

電子と人間……………室住熊三……………(17)

一道会の記……………聚墨生……………(21)

眞の信仰・仮の信仰

近角常観

仮

信仰問題に於いて、最も肝要なることは、眞実の信仰と、権化の信仰との区別である。然し信仰について可否を論ずるは、一見頗る穩かならざるが如きも、眞実の信仰の存在を認むる以上は、是非これを宣明せねばならぬことである。抑々信仰なるものは各人各別のものにして、個々別々のものとすれば、是非善悪は言うべき訳はない。されど信仰に永久不変の動きなき眞実の存在することを信ずる以上は、其区別があらなければならぬ。

歎異鈔の終の有名なる「善悪のふたつ総じてもて存知せざるなり」の教訓は、世の善悪是非はさらに分ならず、唯そらごとたわごとの世の中に、念佛ばかりは眞実であるが、実に世上としても、我も人もそらごとばかりを言うて居る世の中に、唯一つのいたわしきことは、聖人の眞実の信仰を申しまじらかすことであるとの意味である。つまり聖教に眞実と権化の区別がある故に、権をすて、実をと、仮をさしおきて眞を用いるが聖人の本意であるとの仰せである。親鸞聖人、御一代の精神は、畢竟浄土眞実

でも未徹底の状態を以て停滞せぬとも限らず、この点に於いては、たしかに眞の信仰、仮の信仰の区別を注意せねばならぬ。仮の信仰というて別に存在するのではない、たとい眞の信仰をききても十分徹底せざる限りは、仮に陥るのである。教権的に法義を喜ぶ人も、青年教育家も、世の人生問題、信仰問題に傾心する人も、この点につきては眞面目なる自覚があらなければならぬ。我が同朋、読者諸君に於いても其点に於いて十分徹して貰わねばならぬ。世間体に考へたらば、其様に狹隘に言わずともよさそうなものと思ふ人があるであろうが、若し其点を疎かにするなれば宗教として伝道の根本がたぬ様になる。

しかれば、眞実の信仰と権化の信仰との区別の要点は何れであるか。これには諸種の言い方があるのである。されど先づ其適切なる区別を言へば、廻向、不廻向という問題の如きがこれである。

眞実の信仰は如来廻向である。従て行者自力の廻向でない。権化の信仰は行者自力の廻向である。斯う言へば敢えて珍らしい言い方ではない様なれど、抑々廻向というこ

とについて其方向を考えねばならぬ。全体佛教に於いて普通廻向という言葉の使い方に、如来廻向という様な言辭はない。廻向といへば行者が修する

の信仰を顕揚することにあるのである。

かく言へばとて、今時世上によくある異安心呼ばりをし、旧来の教権主義を以て律法的に、新しき青年の信仰の勃興に対して、抑圧を加えんとするが如きは断じて採らぬ処である。何となれば世の教権に固執するばかりで眞の信仰なきものが、いたづらに彼我の見に囚われて、とも角も、眞面目に、人生問題、信仰問題に傾心するのを妨げんとするからである。

何となれば眞実に人生問題、信仰問題に心を注ぐならば、たとい眞実に達せざるも、必ず自己の不十分なることを自覚する時が来るからである。

しかし、又青年の教家に注意すべきことは、果して自己が眞実の信仰に徹せるや否やを反省することが肝要である。即ち、眞実の信仰に徹せりや、仮の信仰に止らざるやの一点である。若し求めて止まざるものならば、必ず自己の不十分を自覚するの期あるべきも、さもなれば、いつま

ところの功德を廻らして、佛、乃至、一切衆生の方へ向けるといふことである。

しかるにこゝに方向を一変して如来廻向という破格なる、しかも常軌を逸したる言辭を用いたまい、且、

『謹んで浄土眞宗を案するに二種の廻向有り』

と、先づ眞宗全体を如来廻向と顕わしたまえるのである、即ち、如来の方より五劫永劫の御苦勞を廻らして、我等に向け給うことである。しかるに自力廻向と云へばとて、決して必ずしも之を知らぬという筈はなけれども、畢竟するに、これを持ち変えて、方角をかえて、衆生より佛に向うからである。自力廻向と言へばとて、念佛を以て自分が功德として如来に向うというばかりではない、たとい佛にせよ、信心にせよ、佛かねてしろしめすと、我心得思つたり作たり、かく信ぜねばならぬと、自分の主観で作たりすることは、皆我方より作られたる信仰である、仮想されたる信仰である。我が思想から思つて居る信仰である。権化と言ひ、定散自力といふはこれである。

眞の如来廻向にあらざる限りは、我等が冥想にて仮定されるものか、理想にて作り上げたものか、何れかになるのである。

今日、青年の多くは、冥想觀念に陥るか、理想実行にあるか、二者その一に居るといふことは古來人間に定機あ

り、散機ありということである。故に、助けて下さると思ふのも、光明の中に在りと思ふのも、喜ばしいと思ふのも、実に権仮に陥り易い。宇宙觀に陥り、運命觀に陥り、自分の心内に形造られたるものは、皆仮の信仰である。たと言葉の上では、真実の信仰と同様と雖も、かく／＼我心で思つて居るのなれば、忽ち権仮に陥るのである。ゆめ／＼油断してはならぬ。

若し本誌を讀みて、斯く／＼と心に思い定めて居るならば、忽ち仮に陥るのである、誰もよく言うことである、殆んど九分九厘たしかの様に思ふと、一分一厘不足の様に思ふ、も少し分からぬ、と云う様に考へて居る人がある。これが又大なる誤りである。真実と権仮の別は、かく部分的の關係ではない。もしたとせば書畫の鑑定をするに、これは九分九厘までは真に近きも、一分だけ、たしかに真物でないところがあるというならば如何、一筆加えて真筆にするという訳には行かぬ。残念ながら全体怪しいものと言わねばならぬ。権仮の信仰というのが即ちこれである。

然らば如何にして真実に転入するかというに、即ちこの如く自分の全体が作りものである、仮想である、理想である、思つて居るのである、虚仮である、不真実である、不潔淨である、ということになる。かくの如き場合に於いて

してと思ふのか、真実佛かねてしろしめすのか。明らかに我等無明の大夜を憐れみましく／＼て、あらわれ給う如来は、煩惱具足の凡夫の我等は、いづれの行にても生死をはなれることあるべからざるを憐れみ給いて、選択本願をたてたまうたのである。「我能く汝を護らん、すべて水火の二河に墮せんことを畏れざれ」と宣うのである。これ即ち無碍光如来である、不可思議光如来である。一如法界のみやこより来生して、法蔵菩薩と名乗りたまうたのである。これ真の報身である、選択本願である、南無阿彌陀佛である。

思ふのではない、仮想するのではない、喜ぶのではない、有難がるのではない。

「明らかに知んぬ、是れ凡聖自力の行に非ず、故に不廻向の行と名くる也、大小の聖人、重軽の悪人、皆同じくひとしく選択の大宝海に帰して、念佛成佛すべし」

善きも悪しきも真に見捨てたまはぬ親心一つである。同一念佛無別道故、ただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべしとよき人のおおせをこうむりて信するほかに別の子細なきなり、四海兄弟、唯天日のかゞやくのみである。南無阿彌陀佛、々々々々、々々々々々々。

嘗て一親友の修養深き人が、とかく美わしき法悦と、真面目なる実行とに驅られて、真の慈悲に接することが出来

て、実に自分自身の失望は一方ならぬ、私なども、長い間、この見地に止りて居りて、理想、仮想の信仰に止りて居たのである。而して今までの信仰が不十分であるということに自覚したるときに、一面には、今まで真の信仰を有せるものとして法を説きつゝあつたのが申訳ない。穴にも入りたい心地である。佛祖に対しても相済まぬ、信者に対しても面目がない。況んや私の如き遠慮なく、此点を指摘するときには、如何に平素私を信認して居る人でも、必ず大反抗の心を起す様になる。

私の如きも、一面には申訳ないと言ひながら、他の一面には信仰が失われて残念とか、吝しいことをしたとか、ともかく我慢、勝他、名聞、利養の心が起るのである。

そこで私が頂かして貰うたのは、この自分が済まぬ／＼と思ふ心も、残念々々と思ふ心も皆知り抜きて、他人は誰一人同情して呉れるものなきのみならず、かくの如き我心を知りたならば、必ず／＼見捨てざるに違ひない、あきれるに違ひないに、却てこれを見捨てざるのみならず、飽くまでその孤独よなきを憐れみて御見捨なき御慈悲が如来廻向である。選択本願である。佛かねてしろしめしてである。煩惱具足と仰せられたのである。返えす／＼も注意すべきことは、佛かねてしろしめしてと思つて喜ぶのではない、喜ぶと喜ばぬとは問題でない、全体佛かねてしろしめ

ながつた。しかるに子を喪つて無限の悲哀に沈めるとき、無限大悲の選択願心聞ききたる一念、信樂開發して、感泣して曰く

「嗚呼、本願招喚の勅命、今こそ明らかに知られた、待ち兼ね給う親心の有り難や、今から思へば今迄の法悦は皆権仮の信仰であつた、聖道權化の方便に、衆生久しく止まりて、諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乗壽命せよ、嗚呼久しく権仮に止りていた」

と。私はこの告白をききて暗涙に咽ひ、且つ懺悔した。私はこの友のかく仮の信仰に止ることを知らぬのではない。そして友も真面目に道を求められた、予も説きて最後徹到の一念に至りて、遂に話が達せなんだ。そして八釜敷く言ひ過ぎる私も、何時も此処を説破徹到することが出来なんだ。

そしていよ／＼真の御慈悲をいただいてから告白せらるるをきくときは、平常八釜敷しすぎると言われて居る私が、猶友人の仮の信仰を転ぜしむるに私がかまりに氣兼ねしすぎた、遠慮すぎた、畢竟するに不親切であつたということである。この時私はなせ、もつと一世に対して直言忠告をせぬかと自ら恥かしく感じた。こはすでに一年有余年前のことであるが、爾來、この友人と万事人生に關する所信に於いて、爾々相照すこと、実に響の相応するが如くであ

る。抑々信仰の見地より人生の問題に対して一定の意見の確立せぬは、即ち所信の定まらぬは、信仰の徹せざる証拠である、よく／＼氣をつけねばならぬことである。

言うまでもなく、真の信仰の徹したる著るしき反応は、真の罪惡觀の發露である。真の御慈悲の徹するといふは、我等の不真実、不清淨の心が、如来の清淨真実に負けることである。いかにしぶとい罪惡深重の私も、如来の見捨てたまわぬ御真実の深さに負けて仕舞うて頭が下がるのである。

奥山に枝折り枝折るは誰がためぞ、親の身すてて帰る子のため、如何に親を捨てつつある私も、飽くまで我を見捨てざるのみならず、猶親心を徹底せしめずば止まぬといふ五劫思惟の御苦勞、不可思議兆載永却の修行は、我が貪瞋痴に対して、欲覺、瞋覺、害覺を生ぜず、欲想、瞋想、害想を起さず、我が龜言惡語に対して、和顏愛語にして、而も意を先にして承問したまい、わが煩惱具足に対して、功德成就せしめたまい、現れたまいし南無阿彌陀佛の親心は、私一人のためなりと真心徹到して、廻心懺悔し奉るばかりである。和讃に曰わく。

釈迦彌陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し
われらが無上の信心を 發起せしめたまひけり。

したるものは、人生問題より信仰に入り、信仰より人生にかえるが如く、また念佛より信心に入り、信心より報謝の念佛にかえるが如く、一実真如の淨土に入りぬれば、必ず衆生淨土にかえり来るのである、しかるに信仰の徹せざるものは、大慶喜心を得ず、佛恩を念報するの心なきが如く、猶自力作善に沈滞するが如く、結果も化土に往生して五百歳の中、三宝を見聞せぬのである。即ち憍慢辺地疑城胎宮にとどまるのである。これ化土には還相なき所以である。

しかれども此処に大に世の教権者流に警告せねばならぬことがある。他の信仰につきて教権的に圧迫せんと試みるの人は、その人が未だ真の御慈悲に徹せざる証拠である。何となれば御慈悲を頂きたる人なれば、其無限の御慈悲に人を導く心が自然に起らねばならぬ。その同情なくして他の信仰に圧迫を加えんとするは御慈悲の分からぬ証拠である。

歎異鈔にも、「辺地の往生をとぐる人、つひには地獄におつべしといふこと、此条いづれの証文にみえ候ぞや」と戒められたのが実である。そも／＼十九、廿の本願をもて、恰も自力微誠の如く心得るが間違である。佛は佛智不思議を疑うものをも飽くまでたすけとげんとあるが、名号不思議である、誓願不思議である。して見ればたとひ假

真心徹到するひとは、

三品の懺悔するひとと

五濁惡世のわれらこそ

ながく生死をすてはて、

金剛堅固の信心の、

彌陀の心光照護して

金剛心なりければ ひとしと宗師はのたまへり
ひとしと宗師はのたまへり
金剛の信心ばかりにて
自然の淨土に到るなれ。
さだまるときをまちえてぞ
ながく生死をへだてける。

信仰の一念、撰取不捨の利益にあづけしめ給うのである、撰取不捨というは真の信仰の特徴である。往生一定の決心である。初めより何時となく、唯光明中に居るといふのではない、御慈悲を頂きたる一念、たしかに御慈悲に囚われるのである。そうなると思おうと思おうも疑えぬのである。逃げようと思おうも逃げられぬのである。かく一度頂きたる以上は、自然の淨土にいたらしめ給うのである。そも／＼自然の淨土というが即ち真実の信仰をいただきたる結果である、極樂無為涅槃界である。寂靜無為の樂である、真報土である、和讃に、

念佛成佛是真宗 萬行諸善これ假門

權實真仮をわかずして 自然の淨土をえぞしらぬ。

信は願より生ずれば、 念佛成佛自然なり

自然はすなはち報土なり 証天涅槃うたがはず。

真の報土にいたり、自然の淨土にいたるゆえに、必ず如より來生して還相廻向の利益にあづかるのである。信仰の徹の信仰にせよ、つまり真の信仰に転入せしめんがための誓願である。

かくの如く考え来れば決して仮の真仰とて、之を徹せしむれば、即ち真の信仰である。世のいかなる人にも、真の信仰に徹せざる限りは仮の信仰にとどまるは当然である。それ故に三願転入というのである。

しかるに真面目に、人生問題や信仰問題に傾心するものを圧迫するというは、自分が真の御慈悲の徹せざることを示すものにして、即ち自分が仮の真仰に止まるか、なお仮の信仰もなくして恐らくは、名聞利養、我慢勝他に止まるにあらざるか、戒むべきことである。かく言えばとて青年教育家や、世の求道者が、知らず識らず仮の信仰に止まらざるかを顧み、真の信仰に転入さしていただくことを怠りてはならぬ。ここに於いて、おしえざれども自然に、真如の門に転入するという教を味わねばならぬ。真如門に入りてこそ還相廻向は来るのである。ここに於いて淨土真宗は往相、還相の二廻向の外なきことを明らかに、頂く次第である。和讃に曰わく。

南無阿彌陀佛の廻向の 恩徳廣大不思議にて
往相廻向の利益には 還相廻向に廻入せり。
往相廻向の大慈より 還相廻向の大悲をう
如来の廻向なかりせば 淨土の菩提はいかがせん。

弥陀観音大菩薩 大願のふねに乗じてぞ
生死の海にうかみつゝ、有情をよばふてのせたまふ。

南無阿弥陀佛、々々々々。々々々々。
(求道第十卷第六号)

聖徳太子の忌日に

花田正夫

二月二十二日は太子の御忌であります。お蔭で年々歳々太子の御徳光をあたらしく仰いで、御前にぬかつきまつることであります。

さて私は近角池山両先生のお蔭で太子をお慕い申し始めたのであります。更に福島先生と白井先生に御手引を蒙つて、太子の聖語に親しみました。ことに親鸞聖人が太子を、救世観世音菩薩の化現と仰がれ、久遠の父母と慕われ、更に和国の教主と鑽仰される御心に、いよゝゝ渴仰のおもいを養われました。

祖師にききて慕いまつらん聖太子

たゞのごとくにあまのごとくに

池山先生詠

さて本回は、私が太子を憶う時、何時も心に浮ぶ太子の金言をかかげて、鑽仰申したいと思ひます。

和を以て貴しと為す、
忤うこと無きを宗と為せ

名古屋大学で渋沢博士が初代の学長をしていられた時、戦争はいよゝゝ激しくなつたが、学長室には「和を以て貴しと為す」の額が従来通り掲げられていた。そこで血氣に

はやる学生達は、これでは士氣が沮喪します、この額を換えて下さいと度々申し出たけれど、学長は従容としてこの精神の大切さを勧められていたと伝え聞いて、私は深い感銘をうけました。

さて停戦後には平和々々の声が巷に満ちましたが、数年前からその声がどよみ勝ちとなり、段々弱くなつて、憲法改革、再軍備やむなしの声がぼそ／＼とつぶやかれて来て、従つて太子のこの金句も「結構なこと」と軽く人々の心を素通りし始めて行くように思われます。

みずあさぎ
ながれのものゝ ひとものは
なみこと／＼く うちづけし
はたこと／＼く わすれゆく

斯うした時の流れのはげしさに際して、崇敬と非難とを超えた、永遠のひかりを、太子のこの金句に仰ぎたいと思ふ次第であります。

さて和の心を、裏から申せば、忤うことなき心であります。仏教ではことに外に賢善の相をあらわし、内に虚仮を抱くことをきびしくいましめられていて、たとえ牛盗人といわれるとも仏法者、後世者ふるなど申されてあります。さて、我々が言うて居る和とは、内外相応したものでな

く、内に一物を持つて居る。所謂妥協的和でしかない。さうでありますから利益次第では「昨日の敵が今日の友」となり「今日の友が明日の敵」とも転ずるので、誠に味気のない交りであります。結局は胸に冷たい氷の心を持つて居る和でしかないのであります。そういう状態にあつて、仏法を談合していることをきびしく誠められるのであります。

近角先生は「こちらの冷たい氷の心も、仏様の無限に温めて下さる太陽の照らしを蒙ると、遂に融かされて了う。こちらの氷の力で太陽を凍らせることは出来ない。如何に冷たい氷も必ず融かされる。そこで、なほ不徹底な聞き方をする人は、太陽は温いからよい、氷もとけて行く、と仏様の慈悲をよるこびながら、然し人間は冷たい氷である、五分と五分でやらねば駄目だという風になつて居る。これでは氷のとけたところがない。太陽の力でとかされた氷なら、水である。この水の心で人にも向かうようになるのは自然であり、それでこそ救われたと云える」という意味を申されて居られます。

転悪成善 衆禍波転、罪障功德の体、等々と聖人が讃仰されるのも、この氷が水と転せられる不可思議のおよるこびであります。

さてそれについて、相対界を脱し得ない我等が、自分の力で氷を水にとかすことは不可能であります。そこに

篤く三宝を敬え

人はなはだ悪しき者すくなし
三宝によりまつらざるば、
何をもつて枉れるを直うせん

悪しき者、枉れる者の、如何ともなし得ぬ身の救いが、
篤敬三宝、南無仏の一道にひらけることをお示し下さるの
であります。しかもこの信仰し帰依し奉る道が、一般の信
心とは全く異つているのであります。即ち

如来の調伏をうけて如来に帰依し
法の津沢を得て信樂の心をおこす

子が母をしたうのは、母心の徹透であります。仏の智慧と
仏の慈悲のうるおうところにやしなわれて、そこに帰依と
信樂の心が発起されるのであります。これ程たしかな、そ
して自然な道がありましようか。こちらであつた、こうだ
と仏を想像して、身勝手なことを思ひかためた信心は、自
分の心と共に碎け崩れます。またそういう単なる主観の産
物ではひとりよがりになります。

があつて、「いまに見とれ」と恨む心がやまぬ……」
というきびしい手紙をくれました。私は友人のこととて、
あけすけに「それほど無念残念であれば真向うてけ、か
なされ。但し眼目一番、大戦の時を想ひ浮べて下さい。鬼
畜米英を討てと怒り狂うて、我は善し、我こそは正義の使
なりとして立ち上つて、百万余の英靈は帰らぬ人となつた。
大兄の家からも二人の愛児を亡くしたではないか。ここ
だ、『共にこれ凡夫のみ』ときびしく仰せ下さるところ
は」と書き送りました。

日本に生れて、この「共にこれ凡夫のみ」の一句を知ら
ない人は本当に宝の山に入つて手を空しうして帰るも同様
であります。我は他非のみの世界は、独善、独断の暗黒界
ののたうちであります。太子の持に深く身誑された勝覺經
は、独善におち易い第七地の菩薩の難を越えて、第八地、
不退の菩薩への転入のことを説かれていと承つて居りま
す。その第八の不退の地において「凡夫なり」という自覚
に達することを述べていられる。十地經の譬によれば

「一人の旅人が急いでいると、向うに大河があり、河水
は満々としている。渡ろうとするが、舟もなく筏もない。
後からはおそろしい人が追いかけてくる。こまつたくと
身も世もなく悶えているとふと夢がさめた、さめて見れば
普段と変るところはなく、天井は上にあり、床は下にあ

衆生に限齊なければ、

如来は限齊の時なく住し給う。

如来に限齊なければ、

大悲も亦限齊なくして世間を安慰す。

無限の大悲を以て世間を安慰す。

是説を作す者を、是を能く如来を説くと名づく

泣くはわれ、涙の種は向うから。点滴のたえざる力によ
つて「水よく石を穿つ」のであります。奈良刑務所で二十
年も前に看守長をしていられた高橋さんが、涙と喜びの中
から「いぢけて手におえぬ囚人を、やむなく独房に収容し
て居りましたが、今日も今日とてさからい、いがみ、そむ
きあはれてやみませんでした。その狂乱の姿を見て、あゝ
自分はいかしくの如くして如来様に御苦勞おかけしている、と
気がかされると、責めぬいていた私の心の底が抜けて、囚
人をおがまされました、有難いことです、南無阿彌陀仏」
と述懐せられたことが昨日の如くあざやかに心に刻まれて
居ります。

共にこれ凡夫のみ。

是非のことわり誰かよく定むべけんや

私の知己の一人が、昨年来、人事の問題で不如意のこと
る。おそろしい賊も、渡れぬ大河も、こまつた自分も、皆
自分の妄念の所作であつた。自分は何の変換もないただの
凡人であつた」

と氣づく様なものであるとあります。ここに相手が悪い、
憎い、どうして見ようもないと行き詰つていた夢が破れて、
自己の妄念妄相の姿が知らされ、そこに久遠の仏の御真実
のひかりを仰ぐのであります。然しここで大切なことは夢
の中で夢を見ることがあります。共にこれ凡夫のみ、と口
真似しているのであれば夢の中で夢を見ているにすぎな
い。太子のこの金言によつて、我等の独善、独断の夢が破
られるところ、前述の奈良の高橋さんの如く、囚人が悪
い、ひどいとのみ責めて居た自分の非が、その囚人に教え
られ、囚人と共に仏光を仰ぐ、広くして極みなき白道がひ
らけるのであります。

善知識を訪ねて

福島政雄

そこでこの四十華嚴經を先づ中心において、然し六十華嚴なんかも参照いたしまして、そしてこのお話を申し上げてみたいと思つて居ります。

一体善財童子というのは何であろうか。これが私の以前からの問題なのでありまして、私自身の解釈でありますけれど、これは成道の積尊に初めて湧き出て来たところの、徹底的求道魂と申しますか、徹底的な求道の御心持、その積尊の徹底的求道心、それを象徴している、それをあらわしているのが善財童子であると、こう云うことを私は前から感じて居ります。

それだから、善財童子の求道というものは、私なんかがいいかげんに求道だ、求道だ、と云うようなことを考えて居ります、そんな狭苦しいものではないのでありまして、実にこの廣大無辺なる求道であります。これから段々申し

華嚴經と云いますものは昔から、中国シナの唐の時代から偉い方が出られて註釈をお書きになつて居りますし、それから、私は拝見しても居りませんけれど山辺習学先生が善財童子の求道をお書きになつてありますし、先に申しました佐々木月樵先生等も熱心に説かれていと云うことでもありまして、私がそういうものを二々読んでいるわけでもありませんし、それこそすこしはそう云う方々の導きを受けて居りますにしましても、私がこの善財童子の求道物語を読みますという、矢張り私の小さな心をおして申し上げるといふことに結局は落着くわけありますから、まあ私の小さな管を通して、この広大な世界をすこしばかり覗いて頂く、あとは皆様が御興味が進みましたら直接お經を読んで頂くがいゝと、こういうことを考えますものでありますから、あらかじめそういうおことわりを申させて頂くのであります。

上げるうちにはつきりしてまいります、善財童子の前には如何なる人と雖も皆善知識である。いや人のみならず、全世界、自然現象の如何なるものと雖も自分にとつての善知識であると、そういうことにまでなつていますようであります。そうでありますからして、これは非常な求道なのであります。

入法界品と申しますと、一番初めのところを開いて見ますといふと、その場所であり、拘沙羅國の都でありましたところの舍衛城の逝多林であります。逝多林と聞くと一寸分り難いところでありましたが、これは祇園林であります。祇園精舎の建つて居るところの林であります。その祇園林が最初の場所になつて居ります。その林にありますところの大莊嚴重閣と云うのでありますからして、非常に立派に飾りたてたところの高樓閣がある、そこで先づ始まるのであります。そこに先づ積尊がおいでになるのであります。

そして積尊の会座、そこに列座して居る菩薩達が先づ五千人ある、こういう風に云われてあります。この五千人の菩薩達のうちで、菩薩達の頭首とも云うべき菩薩は、普賢菩薩と文殊菩薩と云う方であるところなつて居ります。これは佐々木先生の本があります。これをお読みして見ます

と、文殊、普賢と云いますと、仏陀としての積尊を二つに分けて、普賢、文殊といふことになる。普賢は行の方をあらわし、文殊は智慧の方をあらわし、積尊のお働きを二つに分けて見るとこういふことになると思つてあります。

この外にここに沢山の菩薩達の名前をならべてあります、五千人ならべてあるわけありませんが沢山ならべてあります。その菩薩達の名前を見ますといふと、第一番目には勝智、すぐれた智慧と言ふ言葉のついた種々な名前の菩薩をならべてあります。その次には幢と云いまして、とばりのこととありますが、何々幢菩薩といふように幢といふ字のついた菩薩の名前が沢山ならべてあります。

その次には光、ひかりと言ふ言葉の入つた菩薩がまた沢山並べてある。その次には地藏菩薩の蔵と言ふ言葉の入つた菩薩が沢山。その次には明眼菩薩といふ様にこの眼であります。この眼の字の入つた菩薩の名が沢山あります。その次はかんむり、冠の言葉の入つた菩薩の名前が沢山ならべてあります。

次には髻、もとどりと申しますか、あの言葉の入つた菩薩が沢山ならべてあります。次には焰光、ほのおのひかりであります、その焰光と言ふ言葉の入つた菩薩が沢山あります。その次には聚、あつまり、定聚の数といふむつかしい字であります。あの字の入つた福聚菩薩とか云う菩薩で

あります。

その次は声、こえであります。梵声菩薩とか云う声という字の入った菩薩が沢山あります。その次には出生、生れ出ると云う言葉の入った菩薩が沢山。その次には吉祥と云う名前の入った色々の菩薩達。その次には自在、自由自在と云う字の入った菩薩方が沢山。その次には音、おとであります。寂音菩薩というような音という言葉の入った菩薩達。その次には覺と云う名の入った宝覺菩薩というような菩薩。何々覺菩薩というような菩薩が沢山あります。

こう云う名の入った菩薩が十ならべてあるのであります。ところが、今の智、幢、光、藏、眼、冠、と云うような、これが昔の註訳をお書きのこしになつたところによりますれば、その一つ一つが修行の位を現わす名前になつておると云うことであります。

これは一々申しませんが、例えば十地なら、歡喜地から法雲地まで十あります。その十を今の一つ一つにあてはめて、冠、かんむりというのが歡喜地を現わすとか、おしまいの覺というのが法雲地をあらわす。こう云う風であります。菩薩の修行、又はさとり位の位を現わしているということでありますからして、つまり釈尊の前に様々の修行をしている、或は様々のさとりをひらいているところの菩薩達が沢山、五千人もそこに集つて居られるという

そしてそう云う人達が集りまして、みんなが如来の境界を念ずるといふのでありますからして、仏様の境地と云うものはどんなものであるかを心に念じまして、釈尊よ、どうぞ御説法を下さいますようにと説法をお願いするのであります。どうぞ大悲の御心を垂れさせられて普ねくそのお心持を開き現して下さるようにとお願い申し上げるのであります。

頻申

そうすると世尊は師子頻申三昧へ御入りになる。これは四十華嚴の方の言葉であります。頻申とはしきりに申すと言う意味。六十華嚴の方を見ますと云うと師子奮迅三昧とあり、私にはこの方がよく解るように思うのであります。つまりこれからさきの善財童子の求道の有様を見ますといふと実にこの師子奮迅三昧の求道である、非常に勇ましく、然し明朗な心をもつて、勇み立つて求道するのでありますからして、今釈尊は師子奮迅三昧にお入りになつた。その三昧のうちに、今の善財童子の求道ということが始まるのであります。

で、その三昧にお入りになりますというのと、一切の世界が非常におごそかな姿になり、清らかな有様になつてくる。そして今の大莊嚴樓閣という高樓閣がたちまちの間に非常に高くなり、広くなり、何とも云えないいかめしい、

ことになりすすわけであります。そしてその菩薩達がみんな普賢菩薩に順つて、普賢菩薩によく従つて物事をやるというのであります。

その行うところは、何の障りもない無碍という、そう云う有様である。あらゆる煩惱の障りというものを離れていふ。そう云う菩薩達であります。心が限りもなく明るく渡つていふ。そしてその智慧は恰ねく広い、世界に行き渡つていふ。そう云うことであります。それが其処に集つたところの菩薩達のことです。

今度は五百の声聞達が集つていふ。声聞、縁覺という声聞であります。その声聞達も悉く真の道というものが明らかになつていふ。そして煩惱の束縛から離れていて、そして心は静かになつていふ。

その次には沢山の、この俗世間の主であります。王様もありませんし種々であります。その主達が集つて求めて居ります。これ等の人は、始終一切衆生を利益するということをつとめていふ。そして諸々の衆生のために不請之友となる。衆生から請い求められなくてもその友達となる。そしてこの俗世間というものを捨てないで、ことに勝れた智慧に入つていふ、俗世間の主でありますけれども仲々徹底した人達がそこに集つて来ている。

また美しい全世界に満ちひかると云う広大なものになるのであります。そして仏様の威神力のために逝多林が忽ち非常に広くなる。こんなところは仲々面白いところでありませう。釈尊の師子奮迅三昧の中に一切の世界というものが包容されているという、その有様なのであります。

そうしますと云うと、そこに十方世界より菩薩方が集つて来ますのであります。東の方から菩薩方が沢山集つて来て、釈尊に雲の供養、あの空の雲であり、それをさしあげる。それから南の方から菩薩達が集つて来まして、曇、勝、曇、曇、曇の曇であります。そのかつらを差し上げる。西の方からも菩薩方が集つて参りまして、これは須弥山雲と云うのであります。須弥山に立つ雲、そう云う雲を供養申し上げる。それから北の方からまた菩薩達が集つて来まして、宝王衣雲供養、宝の王様の衣の雲の供養、そうした立派な雲を供養する。

それから東北の方からは矢張り菩薩達が集つて参りまして、樓閣雲、たかどののようなおもむきの雲を供養する。それから東南の方から菩薩が集つて来まして、これは光明雲というのでありますから、光りかがやく雲を供養する。西南の方からはまた菩薩が集つて参りまして宝焰雲、たからのおおであります、そう云う雲の供養をする。西北の方

からも集つて来まして影像雲えいどううんというのでありますから、様々な容形が見える雲を供養する。

それから下の方から集つて来まして、これは音声雲おんじやううん、これは声が聞えて来る雲を供養する。それから上の方から集つて来ましたところの菩薩達は、その身に一切の諸仏、十方の国土をその身に現わして、それを供養している。

こう云う、仲々美しい、面白い光景が詳しく述べてあるのであります。

ここを私として考えて見るのでありますが、今申しましたように、大低雲でありましょう。雲又雲、種々な雲でありましょう。そうでありますから、天上の世界というものが、この釈尊のおさとの内容になつてゐる。つまり今で云えば太陽系のみならず星の世界全体というものが、そこに釈尊の心の中に採り入れられて参りまして、そしてこの雲は今頃の天文学で云う星雲と考へてもよいかも知れませんが。

今の天文学で云う星雲と云う、そう云う、つまり全宇宙というものが釈尊のおさとの内容として包み容れられ、採り入れられている。こう云う有様で、つまり釈尊のおさとりには、もう三千大千世界というものが、悉く包容されている、その広大な世界における求道が始まると、こう云

電 子 と 人 間

私はいつも御念仏をとなえながら、電子でんしの事を考へて居る。年の暮にフト寢床の中でこんな事を心に思い浮べたのでペンを取つて書いて見る氣になつた。

人間は物質であると唯物論ゆいぶつろんの人は云う。考へる事も、活動する事も、此れは皆物質を根源とするもので、この物質のなくなる時が死であとに何ものも残らない。これがこの論を唱える人の云い分である。所が此れと対蹠たいちやく的に人間は精神が主体である。靈であるという人がある。魂が根源である。こう云うのを唯心論ゆいしんろんと云う。これが甚だしくなると肉体を否定し、病氣は氣から出るものだから精神さえしやんとして居れば、病氣は無いと云う、仲々危険な思想である。私はどうも此等のどちらの考へ方にも賛成出来ない。

人間は精神的であると共に、物質的であると考へる。電子は波動的はうどうてきであると共に粒子的りゅうてきである。此の意味に於いて人間と電子とは相似しやうじ的である。吾等電気現象を取り扱う電

う風に考へますという、仲々大したものであるというこゝとを感じますのであります。

そして華嚴經の一つの特長であります。海と言う字を非常に多く使つてあります。例えば世界と云う代りに世界海、世界の海という字を使つてある。これは親鸞聖人という方が、御承知のように海という言葉を始終使つて居られる、功德の大宝海という風に。道元禪師は山、山という言葉を多く使つておいでになるそうであります。私は道元禪師のものは一向読んで居りませぬけれど。

それだから、仲々親鸞聖人には華嚴經の影響が非常にあるということ、海という言葉をおさとり、又種々の心持を現わす上にお使いになつたことでも解ります。華嚴經というものの影響を非常に深くお受けになつてゐるというわけであります。

室 住 熊 三

氣屋さんは、六ヶ敷問題で手に負えぬ現象があると、此れを電氣的の現象に置換して其の解決を求めらる。

こう云う電氣的の模型を等価回路びやくがくわいどうという。此れを用いて電圧とか、電流とか、電力とかを測定する。その結果から未解決の難問を見事に解決することになる。人間の複雑多岐の難問が電子で解決出来ると実に有難い事である。電子計算機と云う人間の頭腦の様なものが出現したのも面白い事である。

精神生活と肉体生活の総和がその人を表わす事になり、波動的活動と粒子的活動の総和がその電子を表現する。

肉体の量を表わすものはその質量である。何十キロの体量と云うのがそれである。人間は考へる声こゑと云うが、此の考へる作用を活動量として見よう。ニュートン力学の世界では質量と速度の積を以て其の物体の運動量を表わす。故に人間の運動量を質量たる体力と活動力なる精神力の積と

して表現しよう。

人間には生と死とがある。此れは共に人間の所有である。生きて居るものには死はなくして生のみがある。死者の世界には生はない。私の知人で私より四、五年歳上の人が昨年暮に亡くなった。此の人は常に、私には死というものは無いと云つて居た。なる程生きて居る中は、生きて居るから死はない事になるなど思われたが、此の人も今は生の世界から姿を消してしまつた。彼の世の生を楽しんで居られる事であらう。

生は活動であり、死は静止である。静止した物体の運動量は0である。質量のないものの運動量も亦0である。質量をmで表はし、速度をVで表わせば運動量Mは、mとVとの積となるから式で表わせば $(M = mV)$ となる。

故にmが0でも、Vが0でも、Mは0になることは自明の理である。

生きる事は、大なり小なり運動量を持つ事であつて、静止してはならない。活動には精神的なものと物質的のものがある。精神的なものは自然科学者の取り扱う領域を超えている。しかし若し此れがエネルギー量として現われる時は測量も可能である。脳液とか心電図とかに依つて精神活動を知るものは其の一例である。此れは電子工学の領域である。肉体の運動が静止状態にあつても、精神活動のあ

である。従つて運動量の大きなものは「エネルギー」も大となる。

運動量を大とするには質量を増すと共に速度に相当する精神活動を大にする事が肝要である。財力は質量の内に含まれる。地位を獲得する事も生法力を豊富にする事になるので、財力と大きなつながりを持つ事になる。

質量が如何に大でも速度即ち精神力のなきものは運動量は零である。金ばかり沢山ため込んでも何の活動もしない人は生活力は0である。例へば質量は小でも速度の大なるものは大きな運動量を持つ、電子がそれである。質量は一グラムの一億分の一の、そのまた一億分の一の、そのまた一億分の一の、更らに千八百四十分の一と云う微小なものであるが、速度が非常に早くなるので莫大な仕事を表わす。

肉体を肥やすには栄養を取り、適当な修練が必要である。精神を豊かにするには聖教を聞き、常にこれに教養を加える事を怠つてはならぬ。現代人はとかく肉体を養う事に急にして精神の榮華をとり此れを育てる事を無視して居る向きが多い。誠に寒心すべき事柄である。

肉体と精神の積がその人を表現する。聖者は肉体的質量は小にして精神的活動量は莫大である。故に、運動量は大である。小人は肉体力は大であるが精神界が極めて貧弱であ

るものは生きて居る。此れは精神活動が肉体の上に於いて行われて居るからmは零でなく吾等の世界のものである。処がいくら活動があつても質量の無いものは、運動量は零となるので、そんなものは生きたものとは云えない。幽霊はいくらうらめしいと云つてあばれ廻つても運動量は零であるから此の世の存在ではない。吾等には無干渉な存在である。

此頃TVの御陰で相撲熱が馬鹿に高くなつた。私もそのお蔭を蒙つた一人の様だが、相撲の勝敗の分れる所は決して体力だけではない。ず太いのが、ひ弱いのに勝つと定まらない。相撲解説者、玉の海がよく云う、闘志が大きな「フアクター」の様である。あのずう体の大きな大内山が黒星をかせぐのは全く闘志が不足して居るからである。若乃花の様な横綱として可細い身体でよくその位置を保持するのは闘志の旺盛なためと云わねばならぬ。相撲は全く実力を打ち出した真剣勝負であるが、体力と精神力とが物を云う事をハッキリ表して呉れる世界である。

生きるためには運動量を大としなくてはならぬ。質量mのものがVの速度で走ると、そのもの持つ「エネルギー」は質量mに速度Vの自乗をかけた積の半分である。此れを式で表わせば

$$E = \frac{1}{2} mV^2$$

るから、その積は小である。

肉体は死と共に消滅するが、精神は滅するものでない、しかし肉体と精神とは全く別々の存在ではない、或る根源より流出したものである。この根源を仮りにxとすると、肉体も精神もこのxを変数とする関数である。

此れを式で表現すると

$$\psi = f(x) \quad \phi = g(x)$$

となる。人間は肉体と精神とを変数とする関数である。精神と肉体が各xを変数とする関数であるから、人間はその根源に於て、xを変数とする関数になる。従つて肉体だけでもなく、精神だけでもなく、xによつて肉体としても活現し、精神としても活現する。私はこのxを仏教の示す「如」と見る。

電子も亦かくの如しと云われる。

電子は粒子性と共に波動性である。故に波動がそのものずばりでもなければ、粒子が其の真相でもない。その根源にrを考ふる時は、此れが粒子として活現したり、波動しての作用を起す。即ち粒子性を表すものを $\psi(r)$ とすれば、波動性は $\phi(r)$ なる関数となる。併し電子は此の両性を持つものであるから

$$\psi = f(r) \quad \phi = g(r)$$

となる。私達科学者は此のrを探求している。もしこうい

うものが発見される時、人間の本質にも触れる事が出来る様な気がする。

此のxは不生不滅のものである。色も形もなきものである。相対にて表現出来ないものである。絶対である。言亡慮絶の世界である。自然法爾じぜんぽうじゆんの世界である。これを信知することが人間の最高の理想でなくてはならぬ。

三三、十二、三十一日。

「後記」

人間をxの関数と見る代りに、 α そのものだと見る見方も考えられる。xそのものが肉体として活現するのが物としての人間であり、精神そのものとして活動するのが、人間の精神作用と考える。電子も亦その通りで、電子の根源の γ を考える代りに電子そのものが粒子として活動もし、又波動としても表現する。一月十一日の「毎日」に、鈴木大拙師が、宗教と云う欄で、時間と永遠の問題を論じて居られるが、時間というものは移り変りで、これを措いては時間は表わせぬ。故に永遠と云う変化しないものの時間にはならないと云う様なことを述べられ、その終りに、
「最後の解決は、瞬間が永遠で、生と死そのものが涅槃ねはんで、この世がそのまゝで楽土であるという事でなくてはならぬ。移り行く時間のほかに永遠はない。永遠は絶対の今である。」

一 道 会 の 記

(一一)

聚 墨 生

今回は、昨年以來御大病をせられ、すでに古稀を迎えられました白井先生の御病中の所感を頂きました。浄住寺の一道会には今まで缺かさず御出席下さいまして、晩秋御多忙の一日をお割き下され、左記の御感想を述べて下さいました。

○ 白井成允

毎年この会に遭わせて頂いて居りますが、私は池山先生に直接お教を頂いたことはありませんけれど、近角先生のお世話を頂きました頃、近角先生から池山先生のお噂うわさをよくお聞きしました。お二人は本当に肝胆相照かんたんさうしやうしておいでになり、念佛一味に融けておいでになることを知らされて居りました。それからもう四十年、五十年近くになりました。

今日に到つて、池山先生のお教を慕われる方々が、この様に参集されて居るのに接し、池山先生が信心に生きた、

金剛經という仏書に、過去心不可得、未来心不可得、現在心不可得、という一句がある。ここに雄大な、甚深な考えが表明せられている。いまこれを説明する余裕がない。その意味は生死転変がやがて永遠の生命、絶対の命が、すなはち無限の時間そのものだと云うことである」
と云うて居られるのが、私のこの考え方と相通ずるものがある気がする。しかし私達の如き、低下の凡愚のものはただ南無阿弥陀仏の一念に、この世界に参徹させられることが有難い。

徳の高い方であると、あらためて感じさせられるのであります。そういうことでもありますから池山先生の直接の感じは皆様から教えられたと思います。唯私が老いて居りますせいで、最初に何か申さねばならぬことになり、近頃の感想を一寸申し上げます。

さて私は病気で三ヶ月ばかり病院に入つて居りまして、皆様に大変御心配を頂きました。その病氣入院中に種々なことを思つたのでありますが、そのうちとくに「浄土の往生」ということについて考えさせられました。

いよ／＼大手術というときであります。人間と生れて参りまして七十年の生活を、ひよつとするとこれで終るのかもしれないと、眺めますと、過去のこととも想いあわせました。

丁度五十歳の時、朝鮮の京城で、チブスにかゝりました。その時、脈と呼吸の数の不調で、お医者さんから、危

いと言われました。この時、人生五十と云うが、自分も五十で終るのかと思つたが、その五十年を省みると、正信偈に「一生造悪値弘誓」とあるが全く「一生造悪」であつた。唯そこに「値弘誓」と、本願にあわせて頂いてよかつた、いう感じがいたしました。

それから十年生きのび、二十年生きのび、今日に及びましたが、その五十以後のことを省みますと、五十の時に「一生造悪」と思つて居りましたが、それから十年、二十年後に、こんなに墮落するとは夢にも思つていませんでした。私が十年、二十年後に、年と共に浅間しい自分が出て来て、悲しいことで「一生造悪」という外はない。このうち何年生き延びても、今迄に思ひもかけぬ墮落をして来たから、これから生きのびて、人間として更生して善い事が出来ると思はず、これからサア一五年、六年も生きて居られましようか、どうでしょうか。そのうちにまた今思う以上に墮落するのではないかと思われます。

それにつけても「罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」との、こういう浅間しいものを必ず救うというて下さる、この本願の有難さであります。

若い間は、それ程の事もなく、自分は立派な道を歩んで来たと思つていましたが、それが今になつて考えて見ると、あれは間違つていた。あゝして居ればという愚痴が始

陀の本願を聞かなかつたならば、そらごとたわごとになつてしまふ」

と、本願を聞くことの大切さを菅瀬先生からきびしく言われたのでありますが、今も有難く思い浮べます。

本願を聞き、念佛させて頂くことにより、浅間しい生活も、私のおこたり勝ちの学問も、それで救われて行くのであります。私の七十年の努力もつまらないとの思いと、南無阿弥陀佛をおきかせあつかうことが大変なことであるということをとくに思うのであります。

さて毎日の新聞を読んでいると、日教組の方々の文部省に對立し、反抗していることなどが出ていますが、西洋史を専門にする私の友人が

「現在の日本は、フランス革命の前夜のような姿になつている」

というようなことを云つて、ひどく歎いて話してくれたことがあります。日本国民全体が、悪業の渦巻の中に渦巻いているようであります。この悪業極り、極つて、何か爆発して行くでありませんか。

これがおさまられる道は、聖徳太子の南無佛の一佛乗の教、それを親鸞聖人が民衆に泌みこませて下された、誓願一佛乗の教、こればかりが、今日の時代を救うて下さるの

終起つて来るし、省みると愚痴の連続の様に思えますが、それにつけても、私を嘔吐下された先生方や、友達に、思いもかけぬ失望をおかけしている、思いもかけなかつた自分の罪業が知らしめられるようであります。

さうなつて来ますと、どうも、罪惡深重、煩惱熾盛のものを必ず救うというて下さる佛様が、南無阿弥陀佛とあらわれて、始終そばにつきそうて下さる。この佛様がおいでにならないならば、私の一生は闇黒に閉ざされて了うのに、南無阿弥陀佛にお遭い申したことが、この世に生れた唯一のよろこびであります。

菅瀬芳英先生、この方は佐々木田梁君の師であります。が、この方から或時、そうです、もう四十四、五年も前に、

「汝は何のために生れて来たか」

ということをつねられました。その頃、人生の目的、理想に迷つていて答に窮しましたが、その先生の言われたのに、

「如来所以興出世 唯説弥陀本願海。」

佛様は弥陀の本願を説かんがためにこの世に現れ給うた。私共はここに、唯説弥陀本願海に對し、唯聽弥陀本願海のために、この世に生れたのである。これを聞きまつることが、何より大切な。大学で学問をどんなにしても、弥

でありましよう。今回の病中、そんなことを種々感じて居たのであります。

○ 井上善右工門

「何故あの時にあそこに居らずしてここに居たのか。これが驚きである」と言つたパスカルの言葉を最近特に思うのであります。……………

私は池山先生には芦屋の仏教会館でお話を聞き、先生のお話には何か変つたところがある、筆記しておきたいと思ひ、野間景豊さんと二人で速記したこともあります。當時を想うと思ひ出がつきません。

然し、もう私も五十になりました。先程白井先生の申された御述懐が身にしみるのです。白井先生は五十の御時大病せられ「一生造悪」と感ぜられ、而して十年廿年と経られまして七十になられた今日、「極めて墮落の道を辿つていゝ」と申されましたが、私はまだ、あれをしよう、これをしようと思ひを持つて居りますが、先生の様な方がさう申されると、いよく御本願の外ないと驚き省みさせられました。今日のような集りに出會わせて頂いて人生の一番本當のことをしらせ、しあわせであります。

編集後記

「二月は逃げる」と昔から申します
が、アツと言う間に一月は消え、十五
日は佛の涅槃会、二十二日は太子の御
忌日に当ります。来年二度とお迎え出
来ますことかどうか、お互にわからぬ
生命、御ゆかりの日を大切に迎え且つ
お送りいたしませう。

○

さて本月の近角先生の御講話により
まして、教権主義を以て教界を圧迫す
る人々の非と、未熟の信をもつて絶対
視し、われ心得顔に墮する者呼びさ
まし、温めて下さる、広大な御心に感
動させられます。

律法的善悪沙汰そのもの、教権主義
の牙城にこもる者自体が、善悪沙汰の
十九願的存在であり、これに対抗して
相競う者の姿が、われ心得顔の仮なる
信心であります。

ここに絶対信の照鑑を蒙つて、他方
自然の白光を仰ぐ次第であります。

福島先生の古稀のお記念として歌集
「心光のあと」を出版せられることにな
まりました。歌集「心光」以来十八年間
の御歌を自選されたものであります。

室住先生は、御専門の学問に没頭して
いられますが、その中に、「電子と人
間」といふ御原稿を頂きました。純科
学の立場にあつて、他力信心の御味い
を述べて頂きました。御不審の点は、
鹿兒島市薬師町一三八〇番地の先生宛
におたづね下さい。

○

旧年末は、高松市通町三五、三松旅
館、長岡鶴吉様の来訪を頂き、酒見忠
勢先生の御導きにより近角先生の御提
撕を蒙られて七句の今日に及ぶと感銘
深い信味を領つて下さいました。

又正月には、大字佐平治様が御来庵下
され、三十日に高槻の御宅までお伺ひ
申しました。能登川の弘誓寺様、発
願寺様等々と法雨に浴しました。
榊原師も御来会、寒中にも寒さを忘れ
て温い一日を送らせて頂きました。

すく

御案内

毎月第一、二、三、日曜午後一時
半。一道会館例会。市電、新郊通り
一丁目下車、東入ル一丁半。

○
毎月廿四日午前午後、昭和区小椋町
教西寺、法話会

○
二月廿二日午後二時、四日市々大矢
知、真西寺

三月五日、岡崎市養川町林福寺、

定価 一部 二十円（送共）

半 年 百二十円（送共）

一 年 二百四十円（送共）

名古屋市南区野上町三ノ二八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走三八

印刷 人 本田 政雄

名古屋市南区野上町二ノ二八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番